

令和元年度 第6回 浜松市における文化振興のあり方検討会 議事録

日 時：令和元年7月8日（月）午後1時30分～午後3時30分

場 所：浜松市役所8階 第4委員会室

出席者：佐々木雅幸委員長、笹原恵委員、杉山一成委員、小杉和弘委員、久保田翠委員、
 桧森隆一委員、和久田明弘委員、寺田聖子委員

欠席者：小針由紀隆委員、奥中康人委員、高島知佐子委員、清水和宏委員、前田忍委
 員、伊熊規行委員

報道関係：2名（静岡新聞社1名、中日新聞社1名）

傍聴者：4名

事務局：中村公彦市民部次長（創造都市・文化振興課長）、影山元紀副参事（創造都市・
 文化振興課長補佐）、幸田晃明主幹、野末桃子主任、佐野美緒、牧野尚子

概 要：新文化振興ビジョンについて、事務局の素案を基に、委員による意見交換を
 行った。

議事 （1）新文化振興ビジョン案について

<事務局から資料説明>

（佐々木委員長）

全体的にかなり修正が加わった。

委員の意見がどのように反映されたかご確認いただけたかと思う。

そのうえで何か意見があればお願いします。

（桧森委員）

議論された意見というのは必ずしも整合のとれたものではなく、ここまでまとめるのは大変だったと思う。よくまとまっていると思う。

P23 推進体制の部分で、文化の担い手の中に、「市役所」が入っていないところがすごく大事なことだと思う。市は市民の事務局のようなものなので、担い手を支える役割として環境整備等をやっていくのが仕事である。他市のビジョンなどは、うっかり市が担い手の中に入ってしまったものもあるので、市の役割をきちんと示せているのはよかった。

学校や教育機関、小中高などは「企業等」の等の中に入っていると解釈するのか、それとは別なのかというところが気になる。

（4）大学のところで、日本初の文化政策学部とあるが、デザイン学部の存在も重要なので、果たす役割についてどう考えるかも大切だと思う。

P24 施設の長寿命化、機能更新、廃止を含め…とあるが、廃止と決めると途端に大騒動になる。これからの方向性としては、「統合化」や「複合化」。その施設が持つ機能がなくな

るわけではないという説明の仕方で示していった方がよいだろう。

(事務局 影山)

学校教育機関については、ある種担い手にもなり得るが、どちらかというところ「浜松市」の中に内包されると思っている。子どもたちに機会を提供するような役割として市と教育委員会が協力して事業を行うなど、支える役割と考えている。高校の部活動などはむしろ大学の役割にかなり近いものになると思う。

いずれにしても学校に関しては担い手というよりは、次世代の文化を担う人材を育てたり、社会へ送り出したりしていく役割だと考えている。

デザイン学部の果たす役割の大きさは確かに感じている。特にまちなかで様々な創造的な活動をしている団体があるが、文芸大の卒業生が多く活躍している。学問の面だけでなく、活動という点でも人材を育成する場となっている。特に鴨江アートセンターでは多くの専門の先生方が携わってくれ、一種プレーヤーの役割を果たしながら知識を与える役割を果たしてくれている。そういったことを表現したかった。

施設の複合化については仰るとおりだと思う。それぞれに目的があって設置された施設なので、機能としては残して、施設を見直していくというのが現実的な形だと思う。施設がなくなるということを出すのはハードルが高いが、今後それが必要な時は来る。廃止時の施設が持っていた目的や機能の整理については、個別の事業の中での組み立てになると思われる。もちろん統合複合は考えられる手段なので追記も考えたい。

(佐々木委員長)

P23の図で確認したいのは、市民団体とは何かということ。

国等だと市民団体は文化団体と表記されることが多い。市民団体、というのは定義が広すぎる感覚を受ける。

浜松版アーツカウンシルはいつまで「版」をつけるのか。アーツ&クリエイションとの関係性はどうか。アーツ&クリエイションが固有名詞であるのなら、一方では固有名称で、一方では浜松版~とするのは違和感がある。固有名詞が決まったのであれば整合性のとれるよう記載を修正すべきだろう。

小中学校については市の中に役割が含まれるという説明があつたが、もう少しうまく図の中に表現すべき。

ビジュアルで示す事には意味があるが、一人歩きすることもあるのでもう少し図を練ってほしい。

(和久田委員)

図はとても大事なところだと思う。

もっと大きくして、文章を読まなくてもその図を見れば内容が分かるというのが理想的だろうと考える。市民と言っても様々だし、大学の先生は担い手のように思う。教育機関といっても私立校はあるし、伝統芸能の担い手はこどもだったりする。読む人によって市民の捉え方もさまざまであるので、もう少し丁寧に詳しく描く必要があると思う。

また財団とアーツカウンシルが一緒になっているのも個人的にはやや疑問である。

(笹原委員)

これまで色々意見を申し上げてきたが、うまくまとめて頂いて、前回に比べわかりやすくなったと思う。その上でいくつか意見を。

P2 ビジョン策定の目的の部分、文中にグローバル化ということを加えてはどうか。

また P5 で「文化の多様性が活力と…」のところ、伝統的文化の発信が出て来るが、本文の中でこのトーンが低くなっているように感じる。文化芸術という歴史的な要素がやや薄くなる部分がある。もう少し歴史文化というものを加えると良いのではないか。

特に P18③文化とまちづくりの連携の部分に文化芸術とあるが、むしろ地域遺産という歴史的な文化をめぐって地域の人たちがそれを活用しようとしているのが地域遺産制度であるので、内容に加えた方が良いと思う。

P18④の環境の整備については、ハードの側面を強く感じる。もう少しソフト面での施策的な後押しについての文言が入ると良い。例えば、「生涯学習などの施設の整備・維持・管理等、ハードとソフト両面にわたる…」といった文言でソフトの部分も盛り込むべきと思う。

前回にも様々な取り組みの一覧をつけてはどうかという意見があったかと思うが、その他資料に加えることは考えているのか。

(事務局 影山)

グローバル化については、追加する方向で表現を考えたい。

文化芸術という文言については、言葉の揺れの点で指摘をいただいていた部分でもある。

これまでの文化政策では、主に資料 3 の No.43 の②「学問、芸術、宗教など主に精神的活動から直接的に生み出されたもの」の意味で捉えられていたように思うが、昨今では、国の方針も含めて①「あらゆる人間集団がそれぞれ持っている生活様式を広く総称したもの」の意味合いが強くなり、文化の範囲が広がっている。主に、文化芸術と表現している部分については②、文化という表現では①の意味合いで使用している。

ご指摘のあった P18 については、表現の見直しをしていきたい。ソフト面の表記についてもどのように入れていくか考えたい。

これまでの取り組みについては「前ビジョンでの取り組み」を追加した。

みんなの浜松創造プロジェクトの事業タイトルを羅列してはというご意見もいただいていたが、内容とタイトルがリンクしないものも多く、内容も載せないと伝わらないかもしれないという懸念がある。分量的にも多くなりビジョンとしての趣旨が薄れてしまうと思いい記載をしなかった。その他、付属資料としてつけるべきという意見があれば教えてほしい。

(笹原委員)

全てとは言わなくても、一部でも載っているとイメージがしやすい。

地域遺産についても、区ごとに、こういったものが地域遺産なのかと分かりやすくなる

ので少しずつでも載せていくといいと思う。

(佐々木委員長)

例えば P7 の年表などはもっと大きくし、こういうスペースでコラムを入れる等の工夫が必要なのでは。編集の部分をもう少し頑張ってもらいたい。一目でぱっとわかるようなものをもう少し大きくし、本文を読まずとも分かるようなものを作成していただくのがいいと思う。

(事務局 影山)

最終的には専門家の意見も聞きながら手を加えて、示し方を考えていきたい。

(久保田委員)

P16 施策の展開の文言が頭に入っていない。創造都市・浜松に向けての取り組みを過去 10 年間でいろいろやってきた。それをさらに発展させていきますということを言っているのかなと思って読み始めると、(1) 地域の文化資源…で始まるので、なかなか捉え方が分からない。

創造都市、という中にはいろいろなものが含まれているので、「創造都市・浜松を広げていきます」のような宣言でいいのではないか。今の書き方では、創造都市イコール音楽のような書き方になっているが、これでいいのかと疑問に感じる。

(2) の部分も、市民の創造的な文化活動と伝統的文化の継承、次世代の文化、これらが全部同列で語られることに違和感を覚える。

基本方針はいいと思うが、(1) ~ (3) の言い方をもう少し変えるといいのでは。

(佐々木委員長)

ここは大事なセンテンスである。

(桧森委員)

3つだけでなく、もっとたくさんあってもいいと思う。

(和久田委員)

どこに文章がかかっていくのか非常にわかりづらい。もっと細かくしてもいいし、どうしても文章の終わりに引っ張られるので、(1) は発信することがメインのように感じてしまう。今あるものを磨くということと分けた方が良くはないか。もしくは施策の文中に入れた方がいいのではないか。

音楽の都・浜松がトップにくるのも違和感がある。

(佐々木委員長)

基本方針を 3 本に絞るから分かりにくくなっている。5 本くらい並べてもいいのでは。音楽の都というのは市長の考え方で、「都」ということばに意味がある。日本に都は一つしかないので、日本における音楽文化の首都としての考え方である。

こういうものを書くときの並べ方についても考えたほうが良い。ユネスコに音楽分野で加盟しているのでそこは外せないというのはわかる。ただ、音楽だけが創造都市ではなく、もっとジャンルを広げていこうというのが第 2 ステージであるというのを示した方が良い。

久保田委員の言うようにもう少し表現の仕方を練ってほしい。

(事務局 影山)

基本方針については P14.15 に詳しく記載している。(1) はシビック・プライドの醸成に資するものは何か、市を誇らしく思ってもらえるものは何かを考えてまとめた。一つは音楽であるし、一つは伝統文化、それと創造的な活動を行う人だろうということで一つにまとめた。(2) では、市民の創造的活動のように新しいものを生み出していくことと、これまであるものを守っていくことのどちらも大切であるということを表示しつつ、それらを通じて次の時代の文化が築かれていくという考えでまとめた。3つの目標は相互に関係しあうものであり、それぞれ波及効果があるということを表示するために図にまとめてみたが、もう少し考えたい。

音楽の都の部分については、前ビジョンの基本目標として創造都市・浜松の実現と音楽の都が並んでいた。今回、音楽の都については創造都市の実現に向けてのひとつのツールという捉え方をして、目標から一つ下げ施策として記載した。とはいえ、創造都市ネットワークには音楽分野で加盟をしているし、昨年度の市民アンケートでも音楽に携わる市民の数は圧倒的な多数を占めていた。そうした背景を踏まえると音楽への期待は大きく、これまでと同様に、音楽が本市の文化施策において重要であるとの考えから一番はじめに持ってきている。ただ、重要だけれども、音楽だけではないですよというところも全体の中で表現していきたいと思う。

(久保田委員)

「音楽の都」イコールクラシックみたいになっているので、目標のグレードを下げるのは分かるが、音楽の都をもっと追求していくことは大切ではないかと思っている。音楽にはクラシックやジャズに限らず様々なものがあるので、ジャンルを問わずとは記載をしているものの、もう少し説明をするとわかりやすいのではないか。

伝統文化の扱いが非常に難しい。もちろん過去の伝統文化を大切にすることは当然だが、これはビジョンなので、それをどう未来に生かしていくかということなので、市民の創造的文化活動と伝統的文化の継承と次世代の文化の3つはやはり別のものだと思う。

「次世代」のいろんところでいわれるが、10年後、少子高齢化が進むことを考えると、ある程度年配の方がどうやって元気に過ごせるかという観点で、そこに文化がどこまで貢献できるかという部分が大切なテーマになってくる。「次世代」というくくりでいいのか、そのあたりを踏まえてビジョンでは表現していくべきだと思う。そうした意味で、創造都市というものをもっとしっかり説明ができれば、そのあたりの問題をクリアできるのではないか。

(佐々木委員長)

創造都市ビジョンというのがまた別にある。それを念頭に置いたうえでの文化振興ビジョンである。

確かに市民の創造的活動、伝統文化の継承、次世代の文化、というのは分けた方がいい

のかもしれない。ひとつまとめるのには少し無理があるように感じる。3本でまとめることにこだわらないでいくのはどうか。

シビック・プライドが一番はじめに来るのは違和感があるのかもしれない。これは最後ではないだろうか。

(事務局 影山)

確かにシビック・プライドは最終的に目指す結果になる。全体のつくりとして、バックキャストの考え方で、どこを目指すかというのを一番はじめに示して、そのために何をするのかという組み立てで考えたというところがある。P15の図では、3つの丸それぞれの下に、シビック・プライドの醸成、市民が担い手の主役となる仕組みづくり、文化による課題解決を図るなど、最終的に目指す部分を記載し、そのために何をするのかを3つの基本方針としてまとめた。

最終的に伝わらなければ意味がないので、各順番やいくつにまとめるかというのはいさし考えたい。

(事務局 中村)

これまでの議論の中でも記載の順番についてはご指摘をいただいているので、順序がないような形ということで、こうした図を考えた。

(桧森委員)

他の市、例えば金沢市と比べたら伝統文化の役割が浜松市は低いと思う。金沢は産業や観光にダイレクトに結びついているので、伝統文化の継承がしっくりくる。そういう意味では浜松市はクリエイティブな部分をメインにしたらどうか。

全体を見ていて思うのは、基本目標が「文化で市民の幸せを創り出す都市」となり、前回のビジョンはやや産業寄りだったのが、今回は生活寄りとなっており、その変化を凄く感じる。それはいいことだと思う。「文化で市民の幸せを創り出す都市」といったときの、『市民とは誰?』という点で、人口構成が変化し、高齢化が進む中で、高齢者も文化で幸せになれる都市ということも含め、今このビジョンを出すことは意味があると思う。

細かな点ではP12ビジョンの考え方、という表記が気になる。「考え方」を取って、ビジョンだけにしたほうがいいのではないか。

(杉山委員)

私は学校関係の人間なので、次世代の育成の観点で話をさせて頂くと、現在ゼロからの育成というのが難しくなっている。今まで小中高で行ってきた部活動などの「音楽の入口」のところが、働き方改革や部活動改革の影響も含めて非常に薄くなってきている。小学校の金管バンドフェスティバルに去年は17団体が参加していたが、今年は当初5団体、これに声をかけて今9団体まで持ってきているが、この傾向はものすごく大きくなってきている。これまでは現在の中学校の吹奏楽部が入り口となり、そこから派生してジャズやクラシック、ロックなどをやる人が出てきていた。その入口である学校の吹奏楽部を支えている小学校のゼロからの育成、音楽の授業だけではない音楽との関わりの機会というもの

がこれから急速になくなっていくというところを危惧している。この受け皿をどこかがや
っていかないと、市民の音楽のスタートの機会が減っていく。これが教育現場で危惧され
る部分である。ゼロベースの子達をどう受け入れていくのか、学校だけではやりくりでき
なくなっているという現状を伝えたい。

(事務局 影山)

スポーツの場合は地域のクラブチームによって支えられている部分があるが、文化につ
いては、地域が支え、取り組むというのがそれに比べると少ない。アーツ&クリエイショ
ンの設置意図でもあるが、市民の文化活動を支える仕組みを作ることが大切だと考えてい
る。文化の担い手としての市民、市民団体、企業とまとめさせていただいたが、今後の方
向性として地域での活動母体が育つのを促す取り組みが求められると思う。このようなこ
とをどこまでこのビジョンの中に詳細に書くのかということを考えていかなければならな
いと思う。

経済状況、人口構成も踏まえ、どのように持続可能な形に持っていくのかがこの 10 年間
の課題だと思う。持続可能な仕組み作りを考えていくということ等をビジョンの中から読
み取ってほしいので、そのように作っていききたいと思う。

(佐々木委員長)

P23 (4) は、大学等ではなく大学、教育機関等とするのはどうか。学校教育の現場がど
うだという議論はビジョンですべきことではないが、次世代の担い手の育成をする部分
はどう表現していくか。

(杉山委員)

学校で、ということが難しい。いままでは音楽のまちづくりの中で、市と学校と手を
取り合ってやってきた部分が大きいのだが、ここに来てその学校の基盤が変化してきてい
る。どのように民間が子どもたちの育成に取り組めるようなシステムをつくるのが重要
になる。他都市では、学校の中にクラブハウスのような、外から入れる空間を作り、学校
で使わなくなった楽器を集め、民間の方が土日に子供をそこに集め、教えるというよう
な活動を行っている。場所がないとなかなかできない。地域と連携をとっていかないと難
しいことである。

(和久田委員)

文化振興財団の立場で悩ましいのは、定款上の目的は芸術文化の振興で、本来教育は入
っていないことである。教育事業を受けることもあり、それ自体をやる意義はあると思
いつつ、どこまでやればいいのか、いまひとつやりにくさを感じている。アーティストの育
成、例えば JO・JC については学校教育と切り離されている。文化の教育ということであ
れば、教育財団のようなものがあればいいなと思っているが、そうしたものが難しい中
では文化振興財団がもう少し踏み込んでいいのかとも思う。アクトシティ音楽院のような
人材育成もあるが、学校や地域と一緒にやって取り組む幅広い人材の育成が大事だと思う。

(久保田委員)

P16 (1) ②人材育成はここにしか出てこないのが、担い手の育成だけでなく、担い手を育てるための人材の育成もこれからは必要。子どもだけでなく、高齢者が痴呆にならないように、元気で暮らせるようにということと、文化がどう関わるのかという様なことを考える人材も育てなければいけない。

それから、持続可能な社会のことをもっと入れてほしい。今まで役に立たないとされていた人でも役に立つんだということを高らかに宣言できる時代になってきたが、そこそが文化ができる場所である。障がい者や高齢者等も文化を楽しむだけでなく担い手となる、循環型の社会、文化をつくっていくんだ、というような表現がほしい。SDGsのゴールとも重なっているのだから、持続可能な部分を文化が担えるというところも入れてほしい。

(佐々木委員長)

P11、15 に文化の循環が書かれてはいるが、もう少しストーリーとしてわかりやすい表記が必要である。

(事務局 影山)

やはり今回のビジョンでは持続可能性、循環、というところは非常に意識したところであり、P11、P17、P20 に記載をした。

人材育成については P16 についてはプレーヤーとしての記載に特化したけど、P17 の担い手育成では、子どもたちだけでなく、文化芸術を支えたり応援したり人も育てていきたいという思いは記載したつもりである。イメージしにくいのであればもう少し表現を改めたい。

(佐々木委員長)

今回が素案公表前の最後の会となる。

全体的に文章のメリハリ、構成を今日の意見をもとにもう少し頑張ってもらいたい。

(笹原委員)

最後にもう1点。

P14 (1) 「地域の文化資源を磨き…発信します」という文言が先ほども議論に上がったけど、おそらく SDGs の取り組みというのは、今まで発展とか発達とは言われていたところに、いかにクエスチョンマークを付けるかというところだと思う。だから先に進めるということよりは、もう少し自分たちの足元を深く見つめなおす、自分たちの価値観を見直す、ということがベースにあるので、おそらく創造都市・浜松の発展というよりは深化、深くするというような言葉のほうが良い。あるいは文化の多様性というものをどこに書き込むのかということがずっと課題にはなっていたので、いっそのことここに「創造都市・浜松を深化させ、文化の多様性に目を向けます」といったような文言はどうか。頭のところで、いままで私たちが目を向けていた、これまでのいわゆる文化ではないとここで書き込んでおいて、その他のことを並べていった方がいいのではないかな。

今回非常に重要なのが「文化で市民の幸せを創り出す都市」ということなので、文化を担うために人材がいるのではなく、文化を担うことによって、あるいは文化に触れること

によって人生が豊かになる・幸せになる・人々とのつながりができる、という、それによって何が生まれるのかという意識をもって書き込んでいただくと、このコンセプトにプランがはまっていくように思う。今までとは違った価値観で豊かさを考え、それによって人々が幸せになる、といったビジョンの方向性がちりばめられてはいると思うが、うまく調合されていないので、そのあたりを入れるといいと思う。

(佐々木委員長)

では、事務局まとめてください。

(事務局 中村)

もう少しストーリーの作り方、順番も考えていきたい。概要版についても、もう少し修正をかけたいと思う。また欠席委員にも話を聞いて修正をかけていきたいと思う。

8月の下旬の委員会に掲示していき、パブリックコメントをかけたいので、庁内的な調整の関係で今月中にはもう一度まとめて、佐々木委員長の承諾のもと委員会に提出していきたい。

<終了>